

素点欄には記入しないこと

素点番号
素点

I

II

III

1/2

令和五年度
入学試験問題
解答用紙

国語

国語総合（近代以降の文章）・現代文B

第一問

問一 a 遭遇 b 真剣 c 葛藤 d 指定 e 脅威

問二

現実の社会生活とその言語空間とが内密に触れ合うこと

問三

中性的な言表

（以上二十五字）

問四

他者性

問五

自	よ	近	他	者	性
己	う	代	者	の	
の	の	国	の	あ	り
内	内	無	り	よ	う
なる	なる	自	う	を	自
		覚	覚	さ	せ
		な	さ	る	も
		な	の	の	だ
		な	の	か	ら
		な	の	ら	。

（以上八十字）

問六

上下的、直接的二項関係の連鎖・集合から構成されている日本社会の構成そのものを内容としている敬語法と無自覚に駆使している自分自身への疑いのこと。

問七

異	質	な	他	者	で	あ	る
の	内	なる	異	質	な	も	の
			の	を	発	見	し
							自
							己
							像
							を
							揺
							る
							が
							す
							も
							の
							。

（以上五十字）

2

日本語教育において日本語の敬語は外国人にとって複雑極まりないことを示すことで、その敬語を決して間違えない日本人に、近代日本語の体系の中いかに埋没しているかを明らかにしてくれらるから。

第二問

問一

『奇跡』

問二

1 庸子さんは、フランス語を読めないし、フランス文芸書に興味もないと言っていたから。

2

学生から預かりその本に挟んでいたコピーが、本からはみ出して、それがすぐに目についたから。

問三 「紅茶」をあえて「液体」と表現することで、そのあとに描かれる強くなった雨音のイメージを読み手に喚起させやすくする効果。

問四 「農婦の奇跡」という物語の、母親が必死で息子を自宅に連れ帰ったという内容を知って、先生がほのめかしていた家族になりそうだった存在とは、以前涙交じりに話してくれた男の子のことではないかと気づいたから。

問五 先生には家族になりそうだった子供がおり、その子のことと思わせる氷砂糖に特別な思い入れをもっていたので、最期にも「コオリザトウ」とつぶやいたと気づいたが、身寄りのない先生にもそれほど大切な存在がいたということ。

問六 突山さんが聞き取れなかった先生の最期の言葉が、「コオリザトウ」だったのではないかと気づく手がかりとなり、それに込められた先生の思いを想像し、先生への思いを一層深めるという役割。

第三問

問一 本を置くスペースを筆者と毒で奪い合うこと。

問二 冗談めいた会話を楽しむこともできる仲睦まじい関係。

問三 重い本を持って家と研究室を往復していたのを知りながら、それが病身の毒にとっていかに大変なことであるかということに気づかなかったこと。

問四 毒が残した本の整理をしながら、生前の毒を思いしめじめと感じ入っていたが、毒の本の世界が自分の想像よりも広かったことを知り、毒の新たな一面に感銘を覚えたということ。

問五 生前の毒を、同じ文学研究者として広く書物を読み漁る者同士、本の収蔵をめぐるスペースを争っていた良き好敵手だとみなして向き合ってきた姿勢が読み取れる。

問六 毒の愛した本とは、筆者の本が書棚を圧迫すること、最大の譲歩し、病身でありながら不便をしのぐための向き合い方、持ち歩いているいた毒の姿、毒の本との広範囲な向き合い方、毒の人生、筆者と毒との関わり、象徴する存在である。

(以上百字)